大分県芸術文化振興会議会報

芸振

No.27 50. 6

発行所・大分市府内町　県教育庁文化課内　県芸術文化振興会議事務局
発行人・米　田　貞　一　編集人・衛　藤　　久

恵まれた文化的土壌を生かして

大分県の芸術文化行政

大分県知事　立　木　　勝

新しい芸術の振興をめざす県芸振会議が、発足以来すでに10年の歳月を閲（けみ）します。この間、わが国の社会的変ぼうには著しいものがあり、時代は、経済的発展から人間回復へ、物から心へと推移したといえましょう。その中で、本県の芸術文化がめざましい発展をつづけ、また芸振会議が大きな成果をあげて参りましたことは、まことに喜ばしく、感謝に堪えません。

私は、知事就任以来、県政重点施策の一つとして、教育、文化の向上をかかげて、より豊かな、心のかよいあう県政をすすめて参りました。幸いにして、大分県には、明治日本の指導者である福沢諭吉のほか、三浦梅園、広瀬淡窓、帆足万里などの大先輩達が築き上げた文化遺産があります。また、芸術の分野でも田能村竹田を始め、滝廉太郎、朝倉文夫、福田平八郎、さらには、人間国宝生野祥雲斎など、多くの芸術家を生み出した文化的な土壌もあります。このような人材輩出の歴史は、まさに本県が全国一流の文化県といえましょう。

鶴崎踊り（大分合同新聞社提供）

私はこの歴史を継承し、これらの恵まれた土壌を生かして、新しい芸術文化を育てあげたいと存じております。

現在県では、教育委員会に文化担当課を設けて、音楽、芸術、文芸など各種文化団体の活動を助成すると共に、それらの団体に発表の場を与え、広く県民の皆さんに鑑賞していただくため、毎年秋に大分県芸術祭を開催しています。そして、この『芸術祭』も、最近では、県内居住の文化関係者によって、オペラをはじめ、演劇、文芸、音楽など、県民みずからの企画と創作による、真の意味での〝大分の文化〟を創り上げる場となっております。

今後も、こうして培われた活動をより一層振興していくために、『芸術祭』を〝鑑賞から、創造の場〟へと発展させ、更に振興させる必要があると存じます。

なお、昨年度から、郷土の民俗芸能などを守り、発展させる意味で、「ふるさと大分振興事業」を実施しております。これは、県内の数多くの有形無形の文化遺産を掘り起こし、これを顕彰し、また発表の場を設けることによって、広く県民に紹介し、郷土の伝統文化についての認識を深め、県民のなかに『ふるさと大分』をみなおす心を培うことを目的としたものであります。私は、教育、文化、あるいは芸術、文化振興の窮極のねらいは、情操豊かな人づくりだと考えています。

この意味からも、私は今後の二期目の県政を推進するに当たり、県立芸術会館、総合博物館、風土記の丘など、文化的な施設の建設整備、ふるさと大分の文化遺産の保存育成を図るとともに、県民の新しい芸術文化活動を助長して、豊かな人づくりを通じ、温かい、心の通い合った県づくりを推しすすめて参りたいと考えております。皆さんのご協力をお願い申し上げますとともに、芸振会議の一層のご発展を祈念してやみません。

大分県の音楽

昭和20年、30年代の

ＩＰ合唱団などの思い出

辛島　武雄
県音楽協会長・大分女子短大教授

終戦の年、悲惨そのもの、荒廃の大分市に住所を定め生きてきた一人として、当時の心情をふりかえることが出来る現在、あの日から30年の歳月が夢の間に過ぎ去った。

お互いに虚脱状態であった。しかし何か遠くの彼方からかすかに、新しい時代の鐘が鳴ってくるような気がした。その昭和20年の暮に、ＮＨＫ大分放送局放送部長から連絡があり、大分放送合唱団の再出発について相談をうけ、指揮者の依頼を引き受けた。翌年の春から放送合唱団が組織され、故藤沼恵氏が伴奏者となって協力され、指導育成に当ったが、毎週一回の練習日は夜の７時から９時までで、いまはもう姿も見ない電車に乗って集ってきた。西大分に在った放送局のスタジオから、第１回の初放送を行なったのは４月、以後毎月１回放送した。防音ガラス窓の向うの係の方とアナウンサーの合図にのって、秒読みの時間にあわせて指揮棒を振る。合唱音楽の生の放送で、県民に明るい気持をよみがえらせ、放送による音楽文化の向上に寄与する目的もあって、みんな一生懸命頑張った。そのころの団員の中に立川清登君もいた。

大分市に楽器店を持ち、側面から県内音楽文化に協力された白沢楽器店主がスポンサーの役目になって音楽鑑賞団体を組織したのも印象深い。音楽会を開催することが動機で豊楽会と名づけて出発、作曲部など設けて文化団体の面目も打ちたてた。第１回音楽会はピアノ演奏会で、伊達純氏を招き、教育会館ホールで開催した。そのころの有名な演奏家を招いての行事で豊楽会の存在が評価され、大分合同新聞の東西南北欄に紹介された。バイオリン独奏会の企画では、モギレフスキー氏が来演、その愛情ゆたかな音色、熱のこもった演奏は忘れることも出来ない。外人の演奏に直接ふれることが出来たのは、新しい時代の先駆でもあった。

昭和20年、30年にかけて思い出すことは次々とあるが、音楽的行事を持たれた大分文化センター、大分音楽友の会（大分労音に発展した）などがその都度音楽会を開催した。その頃めずらしく、アメリカのボストン交響楽団が日本各地で演奏会をひらきわが大分市でも開催された。会場は県体育会館で臨時に出来上ったホール、世界的な音楽文化に接するよろこびを味った。

郷土の大先輩、滝廉太郎氏のゆかりの地竹田市ではその記念音楽祭が行なわれた。西日本高校生徒による独唱コンクールを中心に県下の音楽演奏ハイライトを集めた行事で、大分放送合唱団も参加したが、私自身も藤沼恵氏の伴奏で歌ったことがある。

郷土出身の音楽家を一同に集めた大分合同新聞社企画の合同音楽会で中山悌一氏や園田高弘氏の演奏に重量感と力強さを味わった。

（[redacted]）

ＩＰ合唱団　Ｓ31、32年頃？　トキハ文化ホール
向って右前列から、木下、増田チカ子、速水敦子、長尾照子、神谷アナ、辛島武雄、東孝次、伊勢敏郎、次の花束を持った女性不明、次谷沢佐和子、工藤美智子、浜野
後列立っている人右から秋吉、次２人の男性不明、長身、佐藤出、若松、市原、瀬戸、笹田、前の女性牧野、隣の女性和田、後の男性速水、前、小野映子、後、森田、前、御姫道子、後、糸永、前の女性不明、隣の女性迫村

豊楽会

労音の前身として活躍

白沢正一郎
白沢楽器店社長

末だ市内あちこちに焼跡の見られる頃、文化活動どころではなかったが、当時の音楽愛好者が集まり、なんとかして中央から演奏者を招き、生のよい音楽を聴きたいという熱望から、名称を「豊楽会」（名づけ親は辛島武雄先生）と名づけ、年間会費 1,000円、例会は年４回という事で発足したのが昭和24年のことでした。それからは伊達三郎、三宅春恵、園田高弘の各先生方の演奏会を次々と開催しました。

会場は教育会館でしたがピアノは戦時中他に持って行かれてしまって無いので、故藤沼恵先生にお願いして第一高女のスタンウェーをお借りしたり、荷揚小学校、金池小学校他、そのつど三拝九拝しての借りピアノでした。（調律はお手のものですが）…グランドピアノを教育会館の３階まで担ぎ上げ終われば又３階から降して学校までお返しする。の毎回大変な仕事でした。

演奏者との出演交渉には会員の希望をきいていたため、毎回がほとんど一流の演奏者となり、３回目からギャラが払えなくなりポケットマネーで急場を切り抜けたりして運営の苦しい時でした。その頃、「豊楽会は一部の人のお楽しみ会だ」といわれるようになったので会員諸氏に相談して一応休会しました。

昭和29年北九州より労音の呼びかけがありましたので、前回の苦い経験も忘れて労音事務所を引き受け、大分労音の出発、第１回例会を中島小学校講堂で誰れかの声楽のリサイタルを開催、昭和30年中沢先生にバトンタッチして現在の盛会を見るようになった次第です。

今は立派な文化会館にスタンウェー、ヤマハと２台のコンサートグランドが備わり、照明、音響関係の設備も完璧です。又別府、佐伯、日田、津久見の各会館も完成し、世界的な演奏者にも恥しくないだけのものとなりました。

豊楽会時代の事を思うと、夢のような気がします。

今後ますます大分県音楽文化の発展を祈る次第です。

心の豊かさ

衛藤　久
県教育庁文化課長・県芸振会議事務局長

昭和50年度の大分県教育行政の重点施策として「心の豊かさ」「人間らしさを回復する教育」を求めて

1　豊かな人間形成をめざす学校教育の実現を図る。
2　県民総学習の体制を確立し、生涯教育の実現を図る。
3　芸術文化の振興と文化財の保護活用により、県民文化の向上を図る。
(1)　芸術文化の普及振興と芸術文化団体の育成
ア　芸術祭を中心とする芸術文化活動の機会拡充と水準の向上
イ　文化団体の育成強化と文化グループ活動の助長
ウ　県芸術文化振興会議の充実と地域における総合文化団体の組織化の促進

……略

となっています。これでわかりますように県教育行政の中核（基ばん）は、心豊かな人間作りにあります。

また、県芸術文化振興会議は、参加団体一一一・個人会員一〇五人によって組織された民間団体で、

「各種の文化団体相互の連絡提携をはかるとともに、本県の芸術文化振興に寄与する」ことを目的としています。

この会もひとりひとりが人間として、団体の一員として、自らの心の豊かさを求め、人間らしい生活をするために活動するとともに、他の人々の心の糧になり、より多くの県民が心豊かな人間に、心豊かな家庭に、心豊かな社会に、心豊かな国になるよう心がける者の会といえます。

このような行政と県芸術文化振興会議とが表裏一体となって、人間の心の豊かさを求めて努力することが非常に重要であることを改めて考えているところです。

その要が事務局長であり、文化課長である私であると思うと身のちぢむ思いがします。心の貧困な私は、事務局長になったことは神から与えられたものと自覚して、何よりも自分の貧弱な心を見つめ、より豊かな人間になるよう心がけなければと思っています。

米田会長のことばにありますが、今の気持（初心）を忘れず、常に新しい気持ちで情熱と献身をもって会の発展につとめると共に、県民の芸術文化・県芸術文化振興会議の殿堂になるであろう芸術会館の建設に努力することを誓って就任のあいさつといたします。

滝廉太郎音楽祭や西部合唱コンクール

小　長　久　子
大分大教授・県民オペラ協会長

私が郷里の高校から大分大学へ勤めるようになったのが昭和26年であるので、この頃から30年にかけての記憶では竹田市で毎年開催される滝廉太郎音楽祭、そのための県予選（学生・一般）も各分野にわたって盛んに行なわれていた。また、戦後ずっと行なわれてきている西部合唱コンクール予選もこの頃から盛んであった。

当時の会場といえば、もとの教育会館くらいのもので、28年頃、ヒッシユの「冬の旅」が中央映劇でグルリット・トのピアノ伴奏によって行なわれた。オペラ「蝶々夫人」（大谷冽子主演）もこの映劇で公演され、31年頃関西歌劇団による「白孤の湯」「赤い陣羽織」は体育館の特設ステーツで上演されたものだった。別府の公会堂ではフランスの名ピアニスト、コルトーの独奏会、そしてウイーン少年合唱団の来別と外来の演奏家による演奏会もたのしめるようになった時代であった。

[redacted]

ボストン交響楽団の演奏に涙

加　藤　公　康
大分大助教授・大分交響楽団常任指揮者

昭和35年４月に大分に赴任して間もない５月12日に県体育館で開かれたボストン交響楽団演奏会は今でも忘れられない。新しい土地にまだなじめない不安感と、少し前までは東京に居て色々音楽会も聴けたのに、こちらではそうした機会のない苛立たしさなどの入り混じった複雑な心境だったのだろう。最初の音が流れて来た瞬間、感動に体がふるえ涙がこぼれた。

そうした私的な事情はさておいて、外来オーケストラの大分公演はこれがはじめてであり、その後来演した他のオーケストラに比べても、このボストン交響楽団の演奏は最も素晴らしいものの一つだった様に思える。曲はマーラーのアダージョ、チャイコフスキーの交響曲第５番など。アンコールのハイドンの88番の交響曲より終楽章の美しい弦の響き、ヘンデルの水上の音楽の金管の華麗さがすごく印象的だったことを憶えている。なお指揮は正指揮者のミンシュでなく、Ｒ．バーギン。

[redacted]

本格的オーケストラとの出合い

工　藤　紘　喜
県警音楽隊楽長

その日は朝から落ち着かず昼食もそこそこにして学校を早退した。

多分一番乗りだろうと思って馳けつけた大分県営体育館前には、すでに百人近い人が集っていた。開場するのを４時間ほど待ち、館内特設ステージの左手前へ席をとった。

なにしろブラスバンドしか知らない私にとっては本格的なオーケストラを眼前にするのは初めてで、しかもそれが外国のボストンオーケストラであるからその時の心理状態は興奮のるつぼであった。

それは、私が管楽器に熱中していた緑丘高校の３年生であったから15年前の昭和36年の出来事で、今からして想えば何と芸術文化に浴さなかった田舎青年であったかと驚きもする。

それに比べ現在は、県下各市で立派なホールも出来て各種の音楽会が開催されていることは、すばらしい事と思う。

最近の私は、職場での音楽活動とは別に、地元大分交響楽団の一員として演奏にマネージにと微力ながら取り組んでいるが、こうした想い出の中から、今年はぜひどこかの山の中の地区へ巡回演奏をしたいと考える今日この頃である。

（[redacted]

大分の音楽の灯

平　野　博　也
二豊テレビ常務

終戦というより敗戦が実感だった。復員したその日学校の焼跡に行った。校舎の敷石が赤く秋の陽に並んでいた。音楽教室跡がやけにせまくさびしかった。大分の音楽の灯を育ててきた大分師範の音楽教室。その灯は消えてしまうのか……。

上野の仮校舎、共同浴場あとの音楽教室、疎開して助かった貴重なピアノを囲んで唱った。好きな仲間が集ってきた。そして戦後の大分師範音楽部が発足した。灯を消してはならない。

昭和22年卒業前。大分師範戦災復興資金募集運動で大分県下を巡回した。ささやかな音楽会、それでも音楽を愛する人々の反応がひしひしと嬉しかった。大分の音楽の灯は残っていたのだ。

昭和23年 JOIP．ＮＨＫ大分放送局放送合唱団に大分の音楽を愛する者が集って来た。大分の音楽の灯は燃え出した。そして若いグループが次々に生まれ、若い人たちが育って行った。敗戦のあとのあの頃、大分の音楽の灯を守った者たちは、いま大分の音楽の灯の美しさを静かに眺めている……。

[redacted]

大分放送児童合唱団の活動

杉　田　信　男
（旻圭）
大分大付小　総務

昭和21年頃だったと思う。ＮＨＫ大分放送局の長倉放送部長と話す機会があった。たまたま音楽の話に花が咲き、放送児童合唱団を結成し、ラジオを通して県下に子どもの歌声を流したらということになった。

話は急速に具体化し、昭和22年からローカル番組として放送が始まった。当時放送局は西大分にあり、スタジオは狭く、夏にはスタジオの中に氷柱を立てて放送したことも度々であった。この放送は10年余り続いた。この間20分間放送の曲の選定、それに毎日の練習と放送以外に各地で開かれる音楽会の出演や公開放送などとにかく忙がしい毎日であった。

その後間もなく放送合唱団（辛島武雄指導）が結成され、合同で放送や音楽会に出演することも多かった。戦後のすさんだ世の中に少しでも音楽を通して県民の生活や音楽教育に役立てようとしてきた私どもにとって、この放送活動は忘れられない思い出の一つである。

[redacted]

県教組吹奏楽団時代

久　末　　知
大分市竹中中学校長

昭和25年、当時県教組文化部長の藤野新氏の奔走で吹奏楽団が誕生。市内小中教師の集うもの20名。懸命に楽器に取組んでやっと第１回発表会を名劇で挙行した。今考えても冷汗ものの演奏だった。しかし、定例の練習会毎に、単に吹奏楽だけでなく戦後の音楽教育全般を対象に、深夜に至るまで激論を闘かわしたあのころが懐かしい。それにもまして当時のメンバーが、音楽教育のそれぞれの分野で活躍しているのがうれしい。

[redacted]

ＩＰ合唱団　Ｓ25年正月　ＮＨＫスタジオにて

後向き指揮者は池永由雄、前列向って右端から清田美恵子、牧、住吉照子、宗、２列目顔の少し見える男性は川島敏郎、隣は長尾照子、古後信二、顔だけ見える女性八坂和子、井水達子、３列目長身が井上敏、雷隆、菊池、丸坊主少年山下、隣の女性皆上、顔の少し見える女性大津

教育音楽

県音研の創設

真　浄　一　雄
県音研・九音研元会長

戦後の音楽教育の現場は混とんと個人プレーのまとまらない時代だった。そこで当時、首藤幸人、田坂保、後藤初男、杉田信男等の諸氏と話し合い、何とか県全体の研究組織を作ってはということになった。苦労もあったが各郡市の全面協力でついに県音研が生まれた。正に県音楽界の大きな一頁が始まった（昭和30年頃）。研究テーマを毎年設定して県大会を県下廻り持ちの会場をたて前にして、現場実践に貢献した力は極めて大であった。

当時九州音研も発足しその大会を大分がやる結果になった。県音研一丸となって堂々の大会としたのは痛快であった。

県音研の発展は更に県合奏大会にまで発展して行った。私は初代会長以来12年余の長期間をつとめた者として、この間の飛躍的な県全体のレベル向上は、全く快心の喜びとして、強く心に残ることで忘れることはできない。

[redacted]

九音研大分大会も

首　藤　幸　人
県音研顧問

昭和25年、大分県音楽教育研究会結成。
（略称県音研、県内小中学校主体）
昭和26年結成記念研究発表会開催、組織確立。
中津南部小校長　真浄一雄氏　会長・大分碩田中教頭の私副会長
速見山香中校長 古屋敏勝氏 副会長・その他各郡市理事等略す
大分荷揚小　杉田信男氏　事務局長・杉田氏と私が大分在住で推進役
後に田坂保氏・続いて後藤初男氏が県指導主事として協力指導役

思い出すことがら

- 小中校音楽担当教師実技研修会（毎年5回前後）
- 同上県内巡回実技研修会（夏休中県内5ケ所）
- 県小中学校器楽合奏大会創設（毎年1回、31. 11. 3第1回）
- 県音研研究大会（大分・中津・別府・日田・佐伯等巡回）

最大の思い出　（九音研実質第一回大会）

九州音楽教育研究会大分大会（大分市・昭36. 11. 25）

- 役員・諸係事務分担作成（会前・当日・会後別）
- 実演授業者・全体及び分科会発表者・指導者・司会者の決定
- 大会会誌編集諸計画　• 九州各県との連絡交渉
- 中央講師交渉（故下総皖一先生・本大会が故人生涯最後の大講演）
- 大会経費・当時60万円の金集め……（大変な苦労をした）

当時の資料綴を出して見たが身ぶるいする程の多忙さを想起した。しかし大盛会裡に大会を実施できて本県及び九州各県の音楽教育振興発展に寄与できた最も懐かしい思い出である。

[redacted]

育てられる時代と育てる時代

田　坂　　保
全日本合唱連盟西部支部県理事長

S 26年頃・県音研の創設を図ったのは、先輩首藤幸人氏、杉田信男氏と私。ともかく先輩を立てて研究を進めることを基本に、この道の第一人者中津の真浄一雄先輩を会長、東の古屋敏勝、西の本藤直氏を副、大学長は顧問、事務局は首藤杉田氏で発足。その後会長は首藤（九音研）一後藤初男一宮本百人（九音研）一田坂一河村と続く、人間の二つの時期「育てられる時代と育てる時代」を踏んで来た。過去も、現在も。

初めは講師を招いて（真篠将、下総皖一氏）講演や指導を受ける会。D.S を加えるには時間がいった。指導主事の私が荷揚で５年生を借りて合唱指導をして真篠先生の指導を受けた事もある。

指導要領の改訂に当り、大分市教育課程研究会が持たれた。熊本で文部省の会があり、出席された教科調査官８名を大分市にお立寄り願っての研究で、前代未聞のこと。故春山教育長一代の大バクチで、当時総務課長の池見教育長担当学校教育課長の私はハラハラしたが、元上田市長も偉かった。これは単に大分市の研究会では終らなかった。大分県下の新指導要領の定着と新教育課程作成の口火となった。

当時の音楽人は錚々（そうそう）たる人物揃いで、D.S の人選に困るほどだった事を付加しておく。

それまで大分、別府中心の研究が、日田、佐伯、中津、津久見、臼杵市と交互にもたれ、D.S（幼小中高）研究発表、研究演奏という形態であった。

昨年東国東郡で始めて郡部で県音研がもたれた。東郡には宮崎慎（しん）也（や）、原田マサ子というすぐれた実践家を支え研究熱心な先生が多い。会長の終り頃東郡

に招かれた。丁度大分空港の開港ま近かの頃「光は東から、教育も東郡から県下に拡げなさい」。子供のため、教師自身のため、地域教育の進展のためおやりなさい」、と激励したが、見事にその約束を果たし、郡部研究の嚆矢となった。経費、研究の便不便、子供の能力という条件はあろうが、郡部も市部も教育の差のない事を東郡は実証した。研究組織がうまくできれば、研究はできる。やるか、やらないかの問題である。

近頃、女子の音楽主任がふえた。お互が研究のブレーキにならぬよう、勇気を出して実践してほしい。教育者人口の動態から、当然のこと。大分県の音楽教育の担い手は女性の肩に移る―彼女たちの本番が近づいている。大いにがんばってほしいものである。

消　息

○県教育庁文化課の人事異動

このたびの県教育庁の人事異動における文化課の着任された方、転任された方をお知らせします。（ ）は旧任。

着任された方

- 文化課長　衛藤　久（県立庄内養護学校長）
- 課長補佐　木下　孝（福利課長補佐）
- 文化財専門員兼文化財第二係長　佐田　譲（大野土地改良事務所庶務課長）
- 文化係長　太田悠一（県立大分図書館々外係長）

転任された方

- 県立大分図書館長　矢野朔雄（文化課長）
- 河川課課長補佐　山村唯男（課長補佐）
- 学校教育課主幹　平野昭彦（文化財専門員兼文化財第二係長）
- 総務課広報専門員　児玉照明（文化係長）

○県芸振会議役員の異動

団体代表者の交代によって次の方々が新しく理事になられました。

丸岡久（大分勤音協会長）、矢野朔雄（県立図書館長）田川奨（県美協副会長）、木本数一（県高文連会長）。

又事務局も文化課内の異動により、事務局長に衛藤久（新）、次長に木下孝（新）、菅久（旧）、山本勝彦（旧）、事務局職員に太田悠一（新）、佐藤七夫（旧）、広瀬晴四郎（旧）、藤原嘉久（新）がそれぞれ決まりました。

また今年度は「芸振」機関紙を藤原嘉久、文化年鑑を広瀬晴四郎が担当しますのでよろしくお願いします。

三つのエポック

加　藤　正　人
民謡研究家・由布院小校長

終戦の年から、県芸振会議が発足した昭和39年までのおよそ20年間は、私が最も情熱的に音楽活動を展開した年代であった。その活動の広範さと多彩ぶりは、本来つつましく教育に専念すべき教員（大道小11年間、金池小４年間、王子中６年間の勤務）の活動領域を大きく超越したものであったことは確かである。本名をかくして、「はざま・げんと」のペンネームを盛んに用いたのも、その頃のことである。その活動の幾つかを回顧してみよう。

1　「大分アンサンブル」のこと。

昭和21．２年ごろ。大分市内在住の音楽愛好青年たちが、私を主宰者にまつり上げて結成したのが、「大分アンサンブル」という名の軽音楽バンド。現在の大分交響楽団とは比較にならぬほどの貧弱な編成ではあったが、プロとしても駐留軍バンドと立花ダンスホールバンドしかなかった当時、アマチュアでは県下随一の栄光をになう楽団ということに違いはなかった。おはこの「ラ・クンパルシータ」「宵待草」等の演奏や歌謡曲の伴奏と、十数名の団員が余暇をぬって各地を忙しく駆けめぐったものである。昭和28年ごろからは、放送劇の効果音楽もたびたび演奏するまでに成長を遂げたが、昭和30年代に入って徐々に衰退の一途をたどり、いつとはなしに消滅してしまった。

2　「効果音楽」のこと。

昭和23．４のころから、人形劇団「どんぐり座」、児童劇団「次郎」、県及び大分合同新聞主催「巡回子供会」、「大分放送児童劇団」、「大分放送劇団」などと、次々にその効果音楽に手を広げていった。ＮＨＫ大分放送局（ＪＯＩＰ）が西大分にあった頃は、野上順平氏、堀賢治氏、岩津洋一郎氏、園田喜平氏らのＩＰ作家グループがはなばなしく活躍したときで、放送劇黄金時代とも言うべき一時期であった。「福沢諭吉」「郷土伝説物語」「青い並木道」「民謡物語」等々、連続物が相次いで放送され、その効果音楽の作曲や演奏に大忙しであった。

3　「民謡」のこと。

あれこれと効果音楽に取り組むうちに、郷土伝承民謡を素材として作曲することのすぐれた効果に着目し、徐々に民謡集録を手がけるようになった。そして昭和34年、ＮＨＫの全面的援助のもと、故半田康夫教授（民俗学）と組んで県下伝承民謡の計画的掘り起しに着手。集録した分については、ラジオや新聞を通して発表し、また合唱曲などに編曲して盛んに放送したものである。昭和36年、故半田康夫氏との共著で「大分県の民謡」第１集を出版。ついで昭和37年以降、「マテツキ唄」をはじめ数多くの郷土民謡を次々にレコード化し、その甦生と宣揚に意を注ぐこととなった。「民謡研究家」という肩書きをいただくようになったのは、その頃からのことである。

ウイステリアコール

純粋に歌うことだけが

飯倉貞子
ウイステリアコール指揮者

ウイステリアコールが結成されたのは、昭和25年、第一高女で藤沼先生の指導を受けた女学生達の強い希望で、卒業後も先生宅に集まって練習を続けたのが始まりでした。ついで、新制高校に変ってはじめて教え子に男子生徒が混じるようになり、27年12月混声合唱団ウイステリアコールとして、第１回発表演奏会を荷揚町の旧教育会館で持っております。

私は当時大分に居なくて参加出来ませんでしたが、当日のプログラムを見ますと、混声合唱三、女声合唱三、男声合唱二、独唱六、それに二重唱、三重唱と実に17ステージという盛りだくさんのプログラムで、あふれんばかりの意気が感じられます。メンバーは女声22名、男声８名、そのうち男性２名が現在も在籍中で、比較的若い団員の中で貴重な存在になっています。

以来20年代に３回、30年代に６回の演奏会をおこなっていますが、その中から目ぼしい曲目を拾ってみますと、ショスタコービッチのオラトリオ「森の歌」、清水脩合唱組曲「山に祈る」、清瀬保二交声曲「無名戦士」及び組曲「冬のもてこし春だから」、ブラームス「ジプシーの歌」、山本直純合唱組曲「田園・わが愛」などがあり、西日本初演の曲もかなり目につきます。

私が入団したのは、第３回演奏会（昭和29年）からですが、第４回にはヘンデルのメサイアからハレルヤなど数曲を歌い、これ以後毎回メサイア演奏が恒例となりました。

牧師の家に生まれ、生涯熱心なクリスチャンとして過ごされた先生にいかにもふさわしい選曲で、私達もそれを受けついで今日に至るまで定期演奏会には必ず宗教曲のステージを持つようにしているのです。

当時の練習は中島６条にあった先生宅で、毎週木曜日にしていたのですが、何しろ八畳に３、40人から入るのですから、冬はまだしも、夏は蚊取線香を立て、ぎっしり詰め合って身動き出来ない状態で、汗をかきかき歌ったものでした。特に先生はよく太っていらっしゃいましたから、汗をダラダラ流しての指導でした。練習の途中で出るお砂糖入りの玄米茶が楽しみで、時にはそれにお菓子もついて、ティータイムはおしゃべりも一段とはずみ、体をゆすってフッフッとよく笑う先生につられて私達も笑いころげたものです。

今と違って他に楽しみもあまりなかったし、若者のふところも豊かでない時代だったせいもあるでしょうが、純粋に歌うことが好きで好きで、何はおいても集まったし、２時間ほど歌い続けたあと、また南大分や戸次まで歌いながら歩いて帰っていた連中もあった事を考えると、やはり最近は「きちがい」が少くなったなと寂しい気がするのはとしのせいのぐちなのでしょうか。

[redacted]

県マンドリン界

他県との交換演奏会も

堤　功
県マンドリン協会長

私が関係しております大分マンドリン協会を通しての斯楽の生い立ちをふりかえってみたいと思います。

同協会はかつて田村卓夫氏（現県教育センター所長）が若人の明るい職場活動の一かんとしてマンドリンサークルを指導育成され、28年にマンドリン・ソサエティが発足し、32年秋、別府、竹田両マンドリン協会並びにラジオ大分合唱団の賛助を得て第１回演奏会をトキハ文化ホールで開催しております。

この年に学生会員でありました中尾靖夫（東芝東京）、工藤智明（国立芸大講師）両氏を中心に分大経済学部マンクラが創立し、今日に及んでおります。翌33年、指揮者でありました田村氏が中津の高校へ転勤され、会の前途が危ぶまれましたが、幸いにして竹田マンドリン協会を指導されておりました福田五彦氏に専任指導者としてきていただき、名称も大分マンドリン協会と改称し、先生の尽力により本格的なマンドリンオーケストラの形態を整えてまいりました。32年の演奏会に続き毎年定期演奏会を今日まで開いておりますが、この頃は定演に加え中津、竹田マン協との合同演奏会や滝音楽祭、ＯＢＳ、ＮＨＫでの放送出演なども行なっております。

35年には先生は西日本学生マンドリン連盟の名誉会長に、その後全国マンドリン連盟の九州支部長に就任され、その方面の指導にも当られておりました。また、37年の秋には熊本マンドリン協会（指揮者松井達喜氏）に呼びかけ両県文化の交流を図るため合同演奏会を開くこととし第１回演奏会を大分県立体育館で催し、以来隔年開催地を熊本城跡の図書館ホールとかえ、７年間交換演奏会を行なっております。

その後、県芸術祭や産業音楽祭への出演、延岡市、八幡市への演奏旅行、また八幡製鉄所マンドリンクラブとの福岡、電気ホールでの協演、さらに41年には九大マンドリンクラブと福岡市民会館における合同演奏会を開くなど数々の楽しい思い出があります。

なお、40年代に入り、先生は協会在任10年を契機にフクダ・マンドリンシンフォニックを創設し、その専任指導に当られ、ユニークな活躍をされておりますが、先生に代り協会は45年より安東孝洋氏（ＴＯＳ大分放送編成部長）を専任指揮者に迎え現在に至っております。

[redacted]

三曲協会

同志35名で出発

遠藤梢山
県三曲協会長・都山流尺八楽会県支部長

勝つまではの相言葉で必勝を期し念じた太平洋戦争も遂に終結して、戦後の飢餓と混乱が始まったのは、昭和20年である。各地より焼土と化したこの大分へ、それぞれ終戦の苦難をなめつつ帰郷した。それからの数年間は、衣食住を得るため血みどろの生活が続いた。その後社会の秩序が確立し、人々の心に平和がよみがえり、ようやく人間生活に潤いが出はじめた。

昭和27年5月18日大分市京町いづみや楽器店に同好者相集いて協議をした結果、ここに大分、別府三曲協会が創設された。当初の会員数は、絃方20名、尺八15名であった。初代会長は故藤本柳山、副会長田仲苔山で発足した。その後間もなく佐伯市支部結成と同時に会の名称を大分県三曲協会と改めた。昭和27年7月13日大分市白木龍雲寺において、合奏研究会を開いた。昭和27年7月27日都山流尺八抄山会邦楽演奏会（司会益田抄山）を後援し、協会員のみで松竹梅を賛助演奏した。

昭和28年4月5日、協会員菊水秀芳主催の生田流箏曲演奏会が県教育会館で開かれた。昭和28年11月8日京都市より箏曲家久本玄智先生を迎え県教育会館ホールにおいて箏曲演奏会を主催した。曲目、「虫の声」、複協奏曲、「吾妻獅子」、「光輝」ほか。そのほか合奏研究例会を大分市浄安寺で数回開いた。

昭和30年5月5日、日本音楽の天才、箏曲界ではあまりにも有名且つ偉大な故宮城道雄先生を迎え県教育会館で邦楽演奏会を主催した。箏曲家、牧瀬喜代子、牧瀬数江（東京）、深海澄子、指揮者、森脇憲三（福岡）尺八家、島原帆山（広島）故一柳画山（山口）北原篁山（京都）の諸先生も来演され、NHK大分放送合唱団も参加し、昼夜2回の名実共に盛大な会となった。曲目「六段の調べ」「春の海」「ロンドンの夜の雨」「春の賦」ほか。

昭和39年末には会員数67名となった。その間、毎年合奏研究例会を数回浄安寺において開いた。昭和31年2代目会長故菊地矢山、昭和34年3代目会長佐藤漠山、昭和39年4代目会長遠藤梢山へと代った。

昭和31年以後に催された大分県三曲協会主催の邦楽演奏会は、つぎの通りである。・昭和34年11月8日—県教育会館、三曲演奏会、曲目「遠砧」「秋の曲」「松竹梅」ほか14曲、入場無料・昭和35年12月11日—トキハ文化ホール、邦楽演奏会、曲目「秋の韻」「秋の草」「四方の海」ほか18曲、有料・昭和36年10月29日—トキハ文化ホール、現代日本音楽の会、曲目、「越後獅子」「みだれ」「祝典楽」ほか24曲・昭和37年10月14日—トキハ文化ホール、新日本音楽演奏会、曲目、「清水楽」「秋の言葉」「希望の光」ほか33曲・昭和38年11月17日—トキハ文化ホール、箏と尺八の演奏会、曲目「夜々の星」「初鶯」「感謝の一日」ほか22曲・昭和39年11月22日—トキハ文化ホール、箏、三絃、尺八による邦楽演奏会、曲目「秋の調べ」「飛躍」「奈良の四季」ほか24曲。

昭和40年以後の定期演奏会は、県芸術祭参加、昭和41年より会場大分市文化会館となった。この拙稿により当協会の歩みが整理出来たことを感謝します。

[redacted]

民謡

NHK素人のど自慢を機に

池田萬龍
萬謡会長

戦前からこの道の専門家及び一般の趣味をもつ者の間で地道ながら根強い活動をつづけてまいりました。邦楽の内、長唄、小唄、常盤津、清元については戦時中なりをひそめていたものの、一部の人の間でその灯を絶やさぬ貴重な努力がみのって、戦後、昭和21年頃からトキハホールその他で成大な発表会が開かれ、私も出演すると共に、後継者の指導育成に真剣がんばってまいりました。

特に昭和24年頃「素人のど自慢」がNHKで企画され発足するようになってからは、特に民謡部門においてNHK大分放送局の専属伴奏者に依嘱（いしょく）され、従来の古典芸能の専門的技術を民謡の道（ど）に生かすことを考えて、民謡歌手の育成に努めたので数多くののど自慢合格者を輩（はい）出、NHK大分県大会、九州大会、西日本大会、全国決（けつ）勝大会に出場して、そのたびごとに埋れた大分県民謡を世に出しました。

又OBSでの地元民謡番組にも出演し普及発展に大いに努めてまいりました。

昭和28年萬謡会という名称で大分県民謡をはじめ全国民謡を指導する研究団体をつくり、その会主として多くの門弟を育成し世の注目を受けるようになりましたのも、まことに喜ばしいことでございます。これもひとえに私を今日までささえて下さった数多くのみなさま方のおかげと深く感謝しております。

[redacted]

内科・小児科
近藤内科
大分市金池南2丁目11－28上野丘中学前
TEL ㊸ 9553

昭和49年度収支決算書

大分県芸術文化振興会議

収入の部

区分	当初予算額	補正後予算額	決算額	差引増減額
補助金収入	500,000	570,000	570,000	0
県費補助金	500,000	570,000	570,000	0
会費収入	300,000	300,000	300,000	0
団体会費	210,000	210,000	210,000	0
個人会費	90,000	90,000	90,000	0
事業収入	100,000	100,000	100,000	0
年鑑収入	100,000	100,000	100,000	0
雑収入	107,000	137,000	137,008	8
広告料	100,000	130,000	130,000	0
預金利息	7,000	7,000	7,008	8
繰越金	62,533	62,533	62,533	0
合計	1,069,533	1,169,533	1,169,541	8

支出の部

区分	当初予算額	補正後予算額	決算額	差引増減額
賃金	150,000	150,000	150,000	0
報償費	130,000	130,000	130,000	0
旅費	100,000	90,000	80,170	9,830
需用費	605,000	705,000	698,700	6,300
印刷消耗費	590,000	690,000	683,700	6,300
食糧費	15,000	15,000	15,000	0
役務費	60,000	70,000	70,000	0
通信運搬費	60,000	70,000	70,000	0
使用料及賃借料	10,000	10,000	5,500	4,500
予備費	14,533	14,533	3,055	11,478
合計	1,069,533	1,169,533	1,137,425	32,108

収入　1,169,541円　支出　1,137,425円
差引残額　32,116円（翌年度へ繰越）

昭和50年度事業計画書

大分県芸術文化振興会議

事業名	期日	場所	内容
1 機関紙の発行	年4回	県内全域	「芸振」（県芸術文化振興会議機関紙）を年4回発行（27. 28. 29. 30号）
2「大分県文化年鑑」の発行	3月	県内全域	「大分県文化年鑑」（A5判約150P）を刊行、各部門別に活動状況、県芸術祭行事等県下の芸術文化活動のあゆみを集録しあわせて文化団体名簿、市民会館、文化会館等の使用規定を付し刊行する。
3 第11回大分県芸術祭	10月1日～11月30日	県内一円	大分県芸術祭を共催し、文化団体に芸術祭への参加をすすめるとともに、芸術祭共催行事等を実施し県民文化の振興をはかる。
4 市町村単位ならびに地域における芸術文化団体事務局長研修会	7月11日	大分市	実質的に団体の運営に当たっている者が情報交換や問題点を出し合うことにより組織のあり方と今後の運営等について研究協議をする。
5 市町村芸術文化関係活動の指導	年間	県内一円	文化団体の活動状況や県芸術祭参加行事の内容等を調査し、文化活動の振興や文化協会結成等の促進をはかる。
6 会議			主な議題
(1) 事務局会議	6月12日	大分市	1 第11回大分県芸術祭について
(2) 理事会	6月23日 12月	大分市 大分市	2 県芸振の振興等について
(3) 総会	6月23日 12月	大分市 大分市	3 会員研修（パネルディスカッション）
7 協賛事業 ・第7回九州沖縄芸術祭			第7回九州沖縄芸術祭を後援することにより、県内における芸術文化活動の振興をはかる。

文化庁関係行事（大分県関係）

移動芸術祭東京フィルハーモニー交響楽団
　リムスキーコルサコフ作曲交響組曲〝シェラザード〟
　10月30日（木）佐伯文化会館
劇団四季〝ヴェローナの恋人たち〟
　11月15日（土）津久見市民会館
青少年芸術劇場（社）能楽協会　能〝黒塚〟狂言〝神鳴〟
　狂言〝神鳴〟〝掃部〟8月7日（木）津久見市民会館
こども芸術劇場劇団四季〝ふたりのロッテ〟
　8月26日（火）別府国際観光会館
　主催　文化庁・大分県教委・開催市教委等

文化課関係行事

○第16回大分県短文学大会　8月10日　豊泉荘
○大野川流域埋蔵文化財試掘調査
　7月10日～12月10日　野津町、大野町、竹田市、荻町
○祖母山傾山天然記念物ニホンシカ生息状況調査
　7月18日～7月28日　緒方町
○宇佐市法鏡寺埋蔵文化財発掘調査
　7月20日～8月30日　宇佐市
○県文化財愛護少年団指導者講習会
　8月29日～8月30日　臼杵市深田満月寺

昭和50年度予算書

大分県芸術文化振興会議

収入

科目	当初予算額	前年度予算額	比較増減
補助金収入	500,000	570,000	△ 70,000
・県費補助金	500,000	570,000	△ 70,000
会費収入	300,000	300,000	0
・団体会費	210,000	210,000	0
・個人会費	90,000	90,000	0
事業収入	150,000	100,000	50,000
・年鑑収入	150,000	100,000	50,000
雑収入	152,884	137,000	15,884
・広告料	145,000	130,000	15,000
・預金利息	7,884	7,000	884
繰越金	32,116	62,533	△ 30,417
合計	1,135,000	1,169,533	△ 34,533

支出

科目	当初予算額	前年度予算額	比較増減
賃金	150,000	150,000	0
報償費	100,000	130,000	△ 30,000
旅費	65,000	90,000	△ 25,000
需用費	745,000	705,000	40,000
・印刷消耗費	730,000	690,000	40,000
・食糧費	15,000	15,000	0
役務費	60,000	70,000	△ 10,000
・通信運搬費	60,000	70,000	△ 10,000
使用料及賃借料	10,000	10,000	0
予備費	5,000	14,533	△ 9,533
合計	1,135,000	1,169,533	△ 34,533

関係公演・大会等行事予定

○第11回大分県芸術祭公演・大会
（共催・特別参加行事）

期日	公演（大会）名	場所
10月1日（水）	開幕行事 「三曲演奏会」三曲協会	大分文化会館
3日（金）	共催行事 「音楽の夕べ」県職場音楽連盟	大分文化会館
5日（日）	共催行事 県民オペラ「フィガロの結婚」県民オペラ協会	大分文化会館
5日（日）	共催行事 「県俳句大会」県俳句連盟	教育会館
10日（金）	共催行事 「バレエ合同公演」県洋舞協会	大分文化会館
12日（日）	共催行事 「県川柳大会」県番傘川柳連合会	教育会館
5日（日）	共催行事 「短歌コンクールと短歌を語る会」県歌人クラブ	婦人会館
13日（月） ～31日（金）	共催行事 「県美術展覧会」県美術協会	大分文化会館 第1．2小ホール
中旬	共催行事 「県演劇祭」高文連・県連青	豊肥地区
4日（土） ～13日（月）	特別参加行事 「小説物語」大分合同新聞社	大分文化会館 第1．2小ホール
11月26日（水）	閉幕行事　県民演劇宇佐耶馬台国 「女王碑弥呼」県民演劇制作委員会	大分文化会館

○開幕行事プログラム

「三曲演奏」午後6時開演、8時終演、入場料 500円
曲目は八橋検校作曲（古曲）「六段の調べ」出演者50名余。森岡章作曲（新曲）「十七絃のための箏五重奏曲」出演者21名余。中尾都山作曲（尺八二重奏曲）「紅葉」出演者30名余。宮城道雄編曲「松竹梅」箏、三絃、胡弓、つづみ、みさと笛、尺八、出演者50名余。

○第7回九州・沖縄芸術祭公演・公募
（大分県関係）

期日	公演・公募・展名	場所
7月7日（月）	九州オペラフェスティバル 「ヘンゼルとグレーテル」 鹿児島オペラ協会	大分文化会館
7月12日（土）	トリオ演奏会 メンデルスゾーン 「ピアノ三重曲」他 ピアノ　中村紘子 バイオリン　海野義雄　チェロ　堤剛	佐伯文化会館
9月16日（火）	フランス音楽の夕べ 「フランス・日本歌曲」 立木稠子　ピアノ緒方麻喫子	大分文化会館
10月4日（土） ～10日（金）	第5回 九州・沖縄グラフィックデザイン展 九州各地のグラフィックデザイナーの作品 150点	府内会館
5月1日 ～8月30日	第6回 文芸作品公募 九州・沖縄・福岡市・北九州市10地区	県内一円

7月29日（火）	九州オペラフェスティバル 「吉四六昇天」 立川清登 大分県民オペラ 大分交響楽団	北九州市 八幡市民会館
7月31日（木）		延岡市 野口記念会館
8月26日（火）		熊本市 熊本市民会館

主催　九州沖縄文化協会・大分県・大分県教委・大分市教委
後援　文化庁・大分合同新聞社・大分放送・テレビ大分
協賛　大分県芸術文化振興会議

波紋

自動ピアノ

糸永信義
県吹奏楽連事務局長

昭和二十五年七月、たいへん暑い日だったような覚えがある。当時、別府の第一中学校でピアノを購入するため、PTAから十五万円を預って海路神戸へ渡った。終戦直後の混乱期であり、神戸市街はバラックや急造の建物がぽつぽつ立ち並び、あわただしい空気の中にも復興の気運がみなぎっていた。そうした中で、ある楽器店に立ちより、何台かのピアノを見たが、新品のピアノがあるわけでなく、たとえあったところで到底十五万円そこらで購入できるわけでもない。同行した白沢楽器店主のお世話により、中古品の中から一台のピアノを買いもとめることになった。そのピアノが「シャーマン」という自動ピアノである。譜面立のところが扉になっており、それを開けてロールになった楽譜をセットし、足ぶみすると鍵ばんがひとりでに動きだすあれである。西部劇で悪役がピストルにうたれてピアノに倒れかかると、ひとりでにピアノが鳴りだすという映画のシーンにお目にかかったことはあるが……。

さて、神戸から帰って一週間ほどしてピアノは別府港に荷揚げされた。ひきとって音楽室に運んだが、当時の先生方や生徒が珍しがってピアノにむらがり、次々と足ぶみして、演奏を楽しんだ。ベートーベンやショパン、ヨハン・シュトラウスなど三十曲ほどのロールをもらって帰ったのでしばらくは授業時間中に生徒に自由に楽しませた。味けない機械の演奏が、音楽の心をきくよりも、面白さの面で生徒に人気があり、男子のいたずらっ子たちが進んでピアノにさわりたがっていたのを思いだす。現在の恵まれた教育環境と比べると隔世の感を禁じ得ない。

今でも、ときどき当時の卒業生と会合があると、きまって「あの自動ピアノはどうなったのか」とか「ピアノに落書きしてこづかれたなあ」とかよく話題になる。わたしも別府一中を離れて十七年、すでにピアノは廃品になったと聞くが、せめてロールの一本でも倉庫の片隅に埋もれているのではないか、探し出してみたいものだとこのごろ、しきりに思う。

[redacted]74

ニュース

県音楽協会

1．県音楽協会本年度の総会は、去る４月27日、別府市日伯ホテル会議室で行われた。49年度事業報告、50年度予算審議のあと役員改選があった。昨年とほぼ同じメンバーが選出された。

主なる役員氏名次の通り

会　長	辛島　武雄	副会長	久保不二朗
副会長	小長　久子	事務局長	山本勝彦

2　50年度行事企画実施概略

a．新人紹介演奏会
　６月３日大分文化会館ホールで開催　本年度は第８回行事

b．県音楽コンクール企画
　８月中に実施したい計画　本年度は第３回目

c．その他、計画したものを実行に移すよう努力すること。

台本の寄贈

- ８月10日に開催予定のゆりかご舞踊研究所発表会の創作バレエ台本「ほとけの里」（３幕４場、作・今戸公徳）と、シノプレス「滝の子太郎」（原作・松谷みよ子、脚色・今戸公徳、演出振付・平瀬克美）の二冊
- 今秋の県芸術祭閉幕行事に予定されている県民演劇、宇佐耶馬台国「女王卑弥呼」（県民演劇制作委員会、作・中沢とおる）の一冊

事務局から

- 前年度会費未納の団体又は個人会員は至急会費を納入してください。あわせて今年度の会費もお忘れなくお願いします。
- また、会員の異動、事務局や住所の変更についても必ず芸振会議事務局（県教育庁文化課内）にご一報ください。
- 各会で計画されている今年度の行事、催しものなど早目にお知らせくだされば「芸振」のニュースらんを通して会員の皆さんにお伝えします。
- 会員の慶弔についても芸振会議に関係のあるものはなるべく「芸振」で広く会員の皆さんにお知らせしたいと考えていますので、ご遠慮なくご連絡ください。
- 「芸振」次号28号（９月）は「文芸」の〝あの頃あの時〟、29号（12月）は「地域文化及び生活芸術」の〝あの頃あの時〟、30号（３月）は「舞踊」の〝あの頃あの時〟となっていますので、原稿依頼などで関係の方々へお願いにあがると思いますがその節はよろしくお願いします。

消　息

- **叙勲**　芸振会議副会長、県美協会長の宮崎豊氏がこのほど勲四等瑞宝章を受けられた。
- **逝去**　元芸振会議理事、県美協副会長の書家、平田 暘郁氏が６月８日、84歳の長寿を全うされて他界された。本機関紙の題字にある「芸振」の二字は第１号発刊の昭和45年の時、書いてくださったものである。
- **受賞**　芸振会議理事、県民踊連盟事務局長童話作家の園田喜平氏がこのほど久留島武彦児童文化童話賞をうけた。